

# ジャワ島中部地震 — 地域社会と図書館 —

東川 繁

二〇〇六年五月二七日午前六時直前（インドネシア西部時間）、インドネシア・ジャワ島中部の

もうひとつの理由は、単に煉瓦を積み上げただけの低耐震構造住宅が多かったためとされている。

当地区図書館のジャワ島中部地震による被災状況の聞き取りを計画した。さいわい当地区図書館界の

に、マグニチュード六・三の地震が発生した。この地区にある活断層の働きによるものとされている。津波による大きな被害を招いた二〇〇四年一二月のスマトラ島

「ジョグジャカルタ地震」と呼んでいる。ジョグジャカルタ特別州は州と同格の特別行政区で、州都であるジョグジャカルタ市のほか四つの県（Kabupaten）から成るが、今回の地震の被害が最も大きかったのは、そのなかのバントゥル（Bantul）県である。実際、死者の三分の二はこの県で生じているという。建物の倒壊率は五割から七割で、八割という報告もある。

から仲介の労をいただき、現地では震災被害の報告会が開催されることとなった。報告会はジョグジャカルタ地区司書協会主催により、一月一日に開催された。イダ氏は当日アメリカ出張のため、ウェブ会議システムを利用しての参加となった。会議には、同地区の各種図書館から二〇名ほどが参加した。報告の詳細をここに述べることはできないが、被害の概要、復旧作業の内容と進行、図書館サービスの再開と評価に大別できる。特に印象的であったのは、通信網が大きな被害を受けたためコンピュータシステムの復旧が遅れ、オンラインでの作業が長期間不可

いわれているから、それだけ比較すれば巨大地震とはいえないのかもしれない。しかし、震源地が内陸寄りであったため直下型地震となり、被害が拡大したといわれている。被害の正確な規模はいまだに把握しきれないが、六〇〇〇人前後の死者が出たと考えられる。全半壊した家屋数も報告によればらつきがあるが、二〇万戸以上になるもようである。地震の規模に比較して被害が拡大した

### ● 震災被害報告会

筆者はインドネシアにおける資料収集および資料事情調査の一環として二〇一二年一月当初にジョグジャカルタを訪問することになってしたが、これに合わせて

二〇〇六年五月二七日午前六時直前（インドネシア西部時間）、インドネシア・ジャワ島中部の

もうひとつの理由は、単に煉瓦を積み上げただけの低耐震構造住宅が多かったためとされている。

当地区図書館のジャワ島中部地震による被災状況の聞き取りを計画した。さいわい当地区図書館界の



震災被害報告会の様子。画面はイダ氏（筆者撮影）

能になったという点である。オンライン業務が完全に再開したのは、地域全体としては二〇一〇年に入ってからという。それまでの期間は、カード目録を作成したりしてマニュアル業務に頼らざるをえなかったという。報告によると、ジョグジャカルタ地区内で最大の被害を被ったのは、専門図書館のインドネシア芸術研究所図書館と公立図書館のバントゥル図書館である。前者は海岸に近いため、地震よりも津波の被害が大きかったという。バントゥル図書館は実際に訪問し、復旧の状況を確認することができた（写真参照）。

## ●地域社会への貢献

報告会において各図書館の被災・復興状況以上に報告の時間が割かれたのは、地域住民に対する図書館の貢献活動であった。その際、象徴的に繰り返されたのはゴトン・ロヨン (Gotong royong) という言葉である。「相互扶助」などと訳されるが、ジャワを中心としたインドネシアの伝統社会の特質を表す概念のひとつとされている。

地震に限らず大きな災害の発生後はいわゆるPTSD（心的外傷後ストレス障害）が問題になる。インドネシアの人口構造は若年者の多いピラミッド型だが、それも



奥が新築されたパントゥル図書館。手前は日本の援助で建設された血液センター（筆者撮影）



震災前の姿に復元された旧パントゥル図書館。現在は震災記念館となっている。右側は血液センターの屋根（筆者撮影）



震災後ガジャマダ大学内に設置された災害対応施設（筆者撮影）

## ●図書館間国際交流の重要性

今回の訪問では、インドネシア側が図書館災害に関連する外国の情報や経営ノウハウを強く求めていることを感じた。それは、被災時の援助というよりもつと中長期的な視点からの国際協力というべきものである。特に、同じ地震多発国である日本に対する関心は高い。報告会でも日本関連の質問が多く出された。具体的には、東日本大震災における図書館界の対応をはじめとして、図書館の耐震構造・設計、耐震対応書架、備蓄用品など施設設備に関すること、データの保存・保守、図書館情報ネットワークの在り方など多岐にわたる。図書館間の国際的な協力体制の構築が望まれるところであろう。

（ひがしかわ しげる／アジア経済研究所 図書館資料企画課）

あつてか、特に子供たちの心のケアが重視されたという。その一環として、ジョグジャカルタ地区の図書館が中心になり、本の読み聞かせ会が活発に行われた。報告によると、子供たちは熱心に聞き入り、次回の訪問を楽しみにしていたということである。また、図書館の多くが施設の被害を受けたため、従来の来館型サービス中心から自動車を利用した移動図書館（ブックモビル）中心のサービスに切り替えたところ、住民にも好評であったという。

図書館員としての本来の業務以外で地域社会を支える活動も報告された。一例として、パントゥル

県ジュティス (Jatis) 郡のブルスクロン (Bulus Kulon) 地区では、ガジャマダ大学図書館の職員が地震発生の翌月に被災地に出かけ、瓦礫の撤去作業を行っている。同図書館に勤務する職員の家族が犠牲になったことがきっかけであったという。同僚約三〇人は、スコップ、バケツ、くわ、担架、一輪車など瓦礫収集・運搬用の道具類はもろろのこと、テント、食料、飲料も持参するという「完全装備」で現地入りした。道路に山積した瓦礫を数カ所に集めて歩道を確認し、住民の通行や仮設住宅用建設資材の運搬を容易にしたという。